

「投資信託」投資の視点

最近「外国投信」が非常な人気を集めている。3月末の純資産残高は、対前年比で3.7倍に急伸した。国内投信残高が2桁のマイナスとなっているのとは対照的である。

何故「外国投信」に人気があるのかは単純である。銀行預金を始めとする国内の金融商品に飽き足りない個人投資家がたくさんいるからだ。実際95年から反転した円・ドルレート(円安)もあって、「外国投信」は円ベースで年間利回り20%前後の好利回りをあげている。中には資金が集まりすぎて追加募集を打ち切ったファンドもあり、当面過熱人気は続きそうだ。

そんな状況を見て、国内証券会社が一斉に「外国投信」販売を強化している。売れない国内投信を見限って(?)、売れる「外国投信」広告が毎日のように新聞等にデカデカと出ている。

果たして「外国投信」はこれからも好利回りは期待できるのか? 落とし穴はないのか? 国内投信はどうなのか? そんな視点で「投資信託」投資のポイントを考えてみたい。

はっきりいって、我が国でも個人が保有する金融資産の構成はかなりの速度で変化すると思う。今まで圧倒的シェアを誇ってきたのは言うまでもなく預貯金であるが、これからは投資信託が徐々にシェアを高める筈だ。

それは、成熟化し巨額の金融資産を保有してしまった経済が必然的に辿る道である。何故なら成熟した経済下では、保有する金融資産を効率的に運用することでしかその成熟性を維持することが出来ないからで、それは預金等リスクを恐れる間接金融資産では不可能な側面があるからだ。

投資信託を簡単に言えば、一定の明確な運用目的を有するファンドに投資する者を募集し、ファンドマネージャーと称される専門家が自らの責任で運用する商品である。従って、投資信託の成績はファンドマネージャーの力量次第という性格を持っており、当然であるが投資元本は保証の限りではない。

この投資信託という商品は、もちろん最近の商品ではなく日本でも昔から売られてきた。しかし日本の投資信託は不幸な歴史を背負ってきて、むしろ衰退商品のイメージが強い。

私はかつてその不幸な現場に居合わせて、日本

の投資信託が何故駄目なのかを目の前で厭というほど見せられた。そのことはここでは触れないが、だからと言って投資信託そのものが駄目だとは思わなかった。むしろ海外事情を知るに及んで、今後有望な商品であると認識してきた。

小額な個人資産を個人単独で運用してもたかが知れている。しかも個人の運用能力には限界がある。ならば明確な目的意識を持った専門家に運用を託す。これが投資信託の原点である。

だから投資信託選択の第一のポイントは、何で運用するかである。株式なのか、債券なのか、通貨なのか、その複合なのか。それは国内物なのか、米国物なのか、それとも多国物なのか。

そして第二のポイントは、ファンドマネージャーである。前述したように投資信託運用成績のかなりの部分はファンドマネージャーの運用能力に負う。彼らが全能力を賭けて運用しているのかどうかは重要なのだ。日本の投資信託が駄目だった理由の一つは、サラリーマンファンドマネージャーの限界にあった。リスクを恐れるサラリーマンでは、厳しい運用の世界で勝つのは難しい。

だから、ファンドマネージャーがその個人名を明らかにしている投資信託は有望だ。米国の伝説のファンドマネージャー、ピーター・リンチなどがそのいい例である。

第三のポイントは、投資資金の性格である。長期投資が可能なのか、リスクを取れる資金なのか、比較的安全を目指すものなのか。

投資信託は、その運用目的によってリスクの度合いがかなり異なる。当然ハイ・リターンを求めるものはハイ・リスクと考えられる。投下資金の性格によって、投資の対象となる投資信託は違ってきて当たり前である。

そして第四のポイントは、過去の成績である。新商品には過去の実績はないが、過去からある追加型商品には運用実績がある。どのような運用実績をあげているかは重要だ。もちろん将来の成績を約束するものではないが、商品によっては運用者の手腕が覗える。現在では、第三者による客観的評価機関もあるので参考にするとよい。

これは私見だが、投資信託が今後勢力を伸ばさないとしたら、我が国の前途は明るくない。